

札幌市環境プラザ運営協議会 令和7年度第2回 実施概要

1. 日 時 令和8年2月20日(金) 15:00~17:00
2. 会 場 札幌エルプラザ公共4施設 2階 会議室1・2
3. 出席者
 - (1) 委 員 : 安東 義乃 委員 (合同会社エゾリンク)
宇山 生朗 委員 (環境省北海道環境パートナーシップオフィス)
大沼 進 委員 (北海道大学文学研究院)
岡崎 朱実 委員 (環境コンソーシアムえこらぼ)
橋本 結 委員 (北大森林研究会) *公募委員
村井 悠介 委員 (札幌市教育委員会教育課程担当課)
飯岡 慶崇 委員 (札幌市環境局環境都市推進部環境政策課)
高坂 美江 委員 (札幌エルプラザ公共4施設)
 - (2) 札幌市 : 環境政策課環境教育・啓発担当係長、環境政策課推進係係員
 - (3) 事務局 : 佐藤 貴明 (市民活動担当課長)
上杉 直洋 (札幌市環境プラザ)
田中 美和 (札幌市環境プラザ)

4. 会議次第

- (1) 開会
- (2) あいさつ 札幌市環境局 環境都市推進部 環境政策課長 飯岡 慶崇 様
- (3) 運営協議会について
- (4) 委員 自己紹介・近況報告
- (5) 議事
 - ・運営および施設利用状況について (令和7年度報告)
 - ・令和8年度事業計画について
 - ・意見交換「無関心層を巻き込む内容について」
～講師やテーマの考え方、講師選定における視点や工夫について～
- (6) あいさつ 札幌エルプラザ公共4施設館長 高坂 美江
- (7) 閉会

5. 議事概要

・令和7年度事業報告および令和8年度の計画

事務局より令和7年度の事業報告および令和8年度事業計画について説明を行った。

質疑応答

- (委 員) 新規事業の「自然体験活動」は、従来の「こどもエコクラブ」の発展形という理解でよいか。
- (事務局) そのとおりである。

- (委員) 環境保全に関する助成事業について、外部資金の獲得は確定しているのか。
- (事務局) 現時点では確定しておらず、今後申請を進めていく計画である。
- (委員) 講座・研修事業(13番)のターゲットは誰か。
- (事務局) 学校の教員や児童会館職員など、環境教育に取り組む層を対象としている。
- (委員) レベルアップ事業(15番)の内容と回数の考え方は。
- (事務局) 従来、複数回実施していた活動を大きな講演会等へ集約・統括し、より大きな展開を目指すものである。

[成果指標に関する意見]

- (委員) 現状の報告は回数や参加人数(アウトプット)が中心だが、今後は「参加者の変化」という成果(アウトカム)の可視化にシフトすべきである。具体的には、行動変容率や再参加率、アドバイザー派遣後の団体の発展状況などを指標に導入してはどうか。
- (委員) 全ての事業で詳細なアンケートを行うのは負担が大きいため、事業の狙いに応じて「何が成果か」を定義する必要がある。例えば、展示であれば「滞在時間」を成果と捉える視点も重要である。
- (委員) ネットワーク分析を用いて、各活動が次の活動へどのように繋がったかを可視化することで、施設の魅力や注力すべき点が見えてくるのではないか。

・意見交換「無関心層を巻き込む内容について」

事務局より、令和8年度に予定している大規模講演会(定員300名規模)を軸に、無関心層へどうアプローチすべきか意見交換を行った。

- (委員) 「無関心層」を巻き込む手段として、なぜ「講演会」という手法を選定したのか、その経緯を伺いたい。本来、全くの無関心層が自発的に講演会へ参加するとは考えにくく、ターゲットとする「潜在層」に対して、この手法が有効であると判断した具体的な理由を教えてください。
- (事務局) 講演会に限定しているわけではないが、より多くの方へ「気づき」を提供する手段の一つとして検討したものである。背景として、当施設内(共同参画センター)に320名定員のホールがあるため、これまでの小規模な事業に加え、300名規模の大きな展開を一つの選択肢として想定した経緯がある。既存の継続事業を大切にしつつ、これまで当プラザであまり実績のなかった大規模な普及啓発に挑戦したいと考えており、その具体的な内容やアプローチについて、皆様の知見をお借りしたいと考えている。
- (委員) 「講演会」という手段は、すでに関心がある層には有効だが、無関心層へのアプローチとしては効果が限定的である。手段ありきではなく、ターゲット設定を絞り、変化を促す要因を精査した上で検討すべきである。
- (委員) 環境をテーマにした集客の現実として、道主催の会議で40人、環境省のネットワーク行事でようやく100人超という現状がある。環境プラザ単独で300人を

集めるのは非常に高いハードルである。

- (委員) 無関心層に届けるには、学校やスポーツイベント（コンサドーレ札幌等）といった「別の目的で集まっている場」に環境要素を忍び込ませる戦略が有効。
- (委員) 「環境」を前面に出さず、食やスポーツ、ゲーム性などの興味関心を入り口にするナッジ的仕掛けが必要である。
- (委員) エルプラザの複合施設の強みを活かし、館内全体を使った脱出ゲームのような体験型企画を検討してはどうか。
- (委員) 広報面では、インフルエンサーや有名人の起用、SNSの強化が不可欠である。また、札幌駅北口の地下通路など、人通りの多い場所での展示活用も検討の余地がある。
- (委員) 教育委員会の立場（最も無関心層に近い大人）から言えば、有名な環境の先生が来ると言われても足は向かない。しかし、オリンピック選手のような有名人なら「聞いてみようか」という参加動機になりやすい。
- (委員) 新規事業を始めるよりも、今プラザが実施している事業（例：野鳥観察、アウトリーチ）を評価・改善を優先すべきである。
- (委員) アウトリーチ事業では1日で400人の集客実績がある。こうした無関心層との接点を次の行動に繋げる導線設計に重要である。
- (事務局) 300名規模の集客難易度の高さを痛感した。いただいた意見を参考に、手法に囚われすぎず、本来の目的である「気づきの提供」に立ち返り、計画を再検討したい。

以上